

シカゴ大学実験学校の創設の背景にあった デューイの教育学構想 —師範教育から教育科学の確立へ—

小 柳 正 司

(1998年10月15日 受理)

John Dewey's Idea about Pedagogy as a University Discipline
Included in His Aim of the Laboratory School of the University of Chicago

Masashi KOYANAGI

1. はじめに

デューイがシカゴ大学に開設した「実験学校」¹⁾は、彼が自らの教育理論をそこで実地に検証するために設立した学校だと言われることがある。こういう説明はまちがってはいないが、厳密には正確さを欠く。なぜなら、彼は自分の教育理論を実地に検証したいという個人的な要求からこの「実験学校」を設立したわけではないからである。

確かに「実験学校」の開設に先だってデューイが書いた「大学附属小学校組織計画」(1895年秋)²⁾には、後の「私の教育学信条」(1897年1月)³⁾の内容にほぼ等しい教育の諸原理・諸原則が簡潔に記されており、「実験学校」がこれらの諸原理・諸原則に則って設立されたものであることは事実である。その意味では「実験学校」は、デューイの教育理論を実地に試してみ、その結果に基づいて理論を検証したり修正したりする学校だったことにまちがいはない。しかし、このことをもって「実験学校」は、デューイが自らの教育理論を実地に検証するために設立した学校だと理解するならば、「実験学校」の設立という一大事業に込められたデューイのねらいや展望をあまりにも狭く受けとめてしまうことになる。

デューイはいろいろな機会をとらえて「実験学校」の必要性や設立の意義を強調しているが、その際に彼は常に大学における教育学研究の確立と結びつけて「実験学校」の必要性を論じている。それは、直接的には、彼がシカゴ大学教育学科 (Department of Pedagogy) の整備充実に全面的な責任を負っていたことによる。そして、この整備充実の一環として教育学科にも物理学や化学や生物学と同様に実験室 (laboratory) が必要であり、それは完全に準備された設備と有能なスタッフを擁する学校でなければならないと主張したのである。

だが、教育学科にも実験室が必要だというこの主張は、単に物理学や化学や生物学の実験室に対するアナロジーとして言われているのではない。それは根本的には、教育学を単に教員養成の実際的な必要に応じる教科 (subject) ではなく、教育に関する高度な専門研究に従事する学問 (discipline) として確立しようというデューイの野心的な教育学構想から導きだされたものであった。

そしてさらにその背後には、そのような高度な専門科学としての教育学の確立を通して、教育学科をシカゴ大学のような総合大学のあらゆる専門領域を有機的に結びつける結節環にしようという壮大な学問論・大学論がひかえていた。

だから、デューイは「実験学校」をただ単に教育学科という一学科の実験室にとどめず、いわんや自分の教育理論を検証するための実験場という狭い個人的な見地からでもなくて、最終的にはシカゴ大学という総合大学の中の不可欠な研究施設と位置づけ、シカゴ大学全体を幼児教育から大学院課程に至るまでの一貫した教育システムのモデルとして確立するための実験室にしようと考えていたのである。

しかしながら、デューイは当の「実験学校」の管理・運営をめぐるトルブルによって、突然シカゴ大学を辞めてしまう。それによって「実験学校」はもとより、それを軸にした彼の教育学構想も未完のままついでてしまう。

以下では、そのようなデューイの未完の教育学構想をやや立ち入った形で考察してみることにしたい。

2. 教育への関心

哲学の実験場としての教育

1894年7月、デューイは弱冠34才でシカゴ大学哲学科の主任教授 (Head Professor) に着任した。彼はそれまでミシガン大学哲学科の主任教授の職にあったが、中西部の中心都市シカゴとそこに設立されたばかりのユニバーシティに大きな期待を抱いて転出を決意した。彼がシカゴ大学のハーパー学長に宛てて書いた招聘受諾の手紙には、受諾の理由として「哲学科を自分の手で構築できること、先端の研究に主たる関心をもつ人々と一緒に仕事ができること、わたし自身もそうした先端的な研究に従事できること、そしてシカゴで生活できること」があげられていた。⁴⁾

しかし、デューイのシカゴ行きにはもう一つ大きな理由があった。娘のジェーン (Jane M. Dewey) が彼の存命中に書いた「ジョン・デューイの伝記」によれば、それは「哲学・心理学の学科に教育学が含まれていること」であった。⁵⁾ すなわち、シカゴ大学の哲学科 (Department of Philosophy) には教育学科 (Department of Pedagogy) が併設されることになっていて、彼は哲学科とともに教育学科をも自ら主宰することになっていたのである。だが、そのことがなぜ「シカゴ大学からの招聘を受け入れる要因の一つ」⁶⁾ になったのか。

その事情については G. H. ミード (George Herbert Mead) が、ミシガン時代におけるデューイの思想展開を分析しながら次のように説明している。ちなみに、ミードはミシガン大学とシカゴ大学でともにデューイのもとで助教授を勤め、同時にデューイとは家族ぐるみで親交を結んでいた。

……『倫理学概要』(Outline of Ethics) においてわれわれは、意志と観念と諸帰結 (consequences) がすべて行為 (act) の内部に位置づけられていること、そして行為そのものも社会における個人のより広範な活動 (activity) の中に位置づけられていることを見出す。

知識を先在する観念的実在 (pre-existent ideal reality) から導き出すことは完全に消えた。知識は、予想または経験された諸帰結から導き出されることになった。デューイは、道徳行為の心理学的分析を通じて彼の観念論の立場を脱した。彼は、行動 (doing) における知識の機能に着目した。さまざまな葛藤において生ずる問題は絶対的意志の中でのみ解決に到達するというかわりに、個人が行為 (act) にあたって直面する具体的な道徳問題の解決こそが知識を与えることとなった。そして彼の次の段階は教育に向かった。すなわち、学校を通じて自分のこの哲学が教育という場の中で実際に何を達成できるか厳しい検証にかけたのである。彼がシカゴ大学哲学科の主任の職を受け入れたのは、哲学科が教育学科を含むという条件によるものであった。そして、新天地で彼がまっさきに着手したのは実験学校 (Experimental School) の設立であった。そこでは、認識 (knowing) は行動 (doing) の一部であるという原理に基づいて、子どもたちの教育がおこなわれた。⁷⁾

デューイのミシガン時代における観念論的立場からの離脱と彼の教育への関心とがどのように結びついていたのかについては、いまだし詳細な考察が必要である。しかし、ここではとりあえず次の点を確認しておくだけにとどめよう。すなわち、教育は哲学理論を検証する実験場だという後年彼が『民主主義と教育』(1916年) の中で表明することになる考え⁸⁾は、既にミシガン時代にその着想が得られていたことである。それは、彼がさまざまな機会に教育現場との接触をもつようになる中で得られたものであった。

デューイは、ミシガン大学に着任してしばらくの間、大学のアクセレディテーション (accreditation) の活動にたずさわり、州内各地のハイスクールの実情を調査する仕事に従事した。その延長で彼はミシガン・スクールマスターズ・クラブ (Michigan Schoolmasters Club) の設立にも参加し、この組織の活動に深く関与した。さらに彼は、各種の教員集会で「注意力」「記憶」「想像力」「思考」といった、主として学習過程に関係する心理学の論題で講話をおこなった。⁹⁾

おそらくデューイは、学校現場の実状を哲学者の眼で観察し分析したことであろう。また、教員組織の求めに応じて講話をおこなうことは、彼自身それまで純粋に理論的な形でしか理解してこなかった哲学理論を教育活動の生きた現実の中に翻訳して吟味するように促したであろう。彼は学校の教育が依然として旧式の心理学理論に基づく観念連合や形式陶冶の考えに支配されていることを見て取り、「現行の教育方法は、とりわけ初等教育においては、正常な発達についての心理学的諸

原理に合致していないと確信するに至った。」¹⁰⁾そして、認識は行動の一部であり観念は行為を導く仮説であるという彼自身の哲学理論こそ、子どもたちの学習過程と精神発達についてより正しい理解を提供するものと考えたのであろう。こうして彼は、哲学理論を教育の生きたプロセスによって検証する「実験学校」を構想するのである。

デューイ式育児法

ところで、ミシガン時代のデューイは学校よりももっと身近なところで既に教育実験を試みていた。それは彼の家庭である。彼はミシガン時代に3人の子どもをもうけていた。1887年生まれのフレデリック・アーチボルト (Frederick Archibald)、1890年生まれのエヴリン (Evelyn)、そして1893年生まれのモリス (Morris) である。このあとシカゴで生まれた娘のジェインによれば、デューイは「これら三人の子どもを観察することによって、生来の諸傾向の重要性についてウィリアム・ジェームズから学んだことを実践的に確信するようになり、幼児期の正しい発達に大きな重要性を認めることになった。」¹¹⁾彼は、最初の子どもフレデリックが生まれた1887年から三番目の子どもモリスが生まれた1893年までの間、自分の三人の子どもについて観察をおこない、その結果に基づいて「幼児言語の心理学」という論文を書いた。¹²⁾

実際、デューイの家では子どもたちがかなり奔放にふるまっていたようである。しかし、それは無責任な放任というよりも、むしろ世間並みの大人の価値観から離れたときの子どもの生来の姿を観察するためであったようだ。いわば、意図的に試られた放任ということである。例えば次のようなエピソードが報告されている。

デューイのミシガン大学時代の同僚であったトマス・トゥルーブラッド (Thomas Trueblood) 教授は、デューイが自分の子どもたちを観察対象にしていたことについて、次のような思い出を語った。あるとき、トゥルーブラッド教授は夫人とともにデューイの家にディナーに招かれた。夫妻は、デューイと夫人のアリスが子どもたちの教育について興味深い理論と実践を発展させようとしていることをまったく知らなかった。子どもの一人がトゥルーブラッド夫人を標的にしてものを投げようとするので、夫人は自己防衛のためにその子を制止しようとしたが、デューイ夫人が頭を横に振りながらこうささやいた。「そのままにしておいて。お父さんがその子を研究しているの。」¹³⁾

もちろん、すべてが研究のための放任であったわけではないであろう。が、やはり全体としてデューイ夫妻の間には、ピューリタニズムの世話やきの干渉を嫌って、意図的に放任を試みるという姿勢は強かったと思われる。つまり、教育とは子どもの自然を否定することではなくて肯定することだという教育観を自分たちの家庭で試してみるという姿勢である。子どもたちはよほどのことがないかぎり、まずは自由にふるまい、自分で自分を試しながら成長していくべきであって、大人が先回りをして手を出すことはたとえ子どものことを思う善意からではあっても、子どもの生き

る権利を侵害することに等しい。それは理論というよりも家庭生活と子育てに関する信条といったものであり、デューイ夫妻はこうした新しい子ども観・育児観を二人の間で共有するとともに、ピューリタニズムの古い子ども観・育児観への挑戦を大胆に試みる若い夫婦だったということである。

デューイ夫妻の子育ては、その常識やぶりの特異さゆえに近所や知人の間で「デューイ式育児法」(Dewey methods)として評判になった。¹⁴⁾それにもつわるエピソードにはことかかない。その中でも有名なものはバスタブ事件であろう。ミシガン大学哲学科の同僚であったアルフレッド・ロイド (Alfred Henry Lloyd) は、デューイ・ファミリーの父子関係が普通の家庭とはかなり違っていたことを次のように回想している。

ある日デューイが自宅の書斎で研究会をおこなっていたとき、一番上の子のフレッドがバスタブに水をいっぱいはって何隻か船を浮かべて夢中になっていた。この実験の最中にバスタブから水があふれて階下に流れ出した。フレッドは客たちにかまわず、いきなり父親に助けを求めた。みんなはフレッドがこう叫ぶ声を聞いた。「ジョン・デューイ、すぐここに来て床をふくのを手伝って。」¹⁵⁾

またロイド夫人の回想によれば、ちょうど寒さの厳しいおり、どこの親も子どもたちに靴とストッキングをきちんとはくように言い付けていたのに、デューイ家の子どもたちはそういう拘束を受けていなかったらしい。そこで近所に住む一人の婦人が親切にもデューイ夫人に忠告するために警察官を呼んだ。すると、彼女は警察官に向かって即座にこう言った。「あなたの仕事はほかにあるでしょう。私は私のやり方でちゃんと子どもを育てています。」¹⁶⁾

デューイ夫人については次のような話も伝わっている。アンナーバー (ミシガン大学の所在地 Ann Arbor) で三番目の子どもを出産するとき、デューイ夫妻は超モダンな考えを実行した。夫人の分娩中に二人の子どもが部屋を出たり入ったりするのを許していることを知って、友人や近所の人たちは衝撃を受けた。しかも、夫人は子どもたちに出産にたちあう機会を提供しながら、赤ちゃんはどうやって生まれてくるのか誕生のプロセスを説明していたというのである。主治医の女医はこういうやり方に強く反対したが聞き入れられなかった。その女医はとうとうデューイ家の家庭医をやめてしまった。彼女は前々からデューイ夫妻の子どもの育て方に疑問を抱いていた。というのも、子どもたちはいつも風邪をひき、鼻水をたらしていたからであった。¹⁷⁾

さらに、デューイの家の近所に住んでいた人の話として次のようなエピソードが伝えられている。

ある日デューイ夫人は階下において、子どもたちがみょうに静かなことに気づいた。それで、どうなっているのか確かめることにした。デューイ家の子どもたちは普段やりたいことを何でも自由にやっていたから、ひごろはまったくにぎやかだった。そのため、デューイ夫人が注意を払うときはいつも彼らが静かになったときだった。屋根裏のドアがきしんでいた。夫人は階段を静かにのぼっていった。見ると、三人の

子どもがみな素っ裸になっていた。いや、フレッドだけはシルクハットをかぶり、傘を手にしていた。彼は屋根裏の床を莊嚴にのし歩き、ほかの二人は隅にうずくまっていた。

「フレッド、あなた何してるの」と夫人が尋ねると、フレッドは答えてこう言った。「ぼくたちはエデンの園のアダムとイヴをやっているんだ。ぼくは夜の冷氣の中を歩いている主なる万能の神だ。エヴリンとモリスはアダムとイヴで、主に見られないように隠れているのさ。」¹⁸⁾

ここでフレッドがやっていることは、後の「実験学校」の授業風景をそのまま連想させる。というのも「実験学校」では、幼い子どもたちが古代ギリシアの鎧や兜の模型を作ってそれらを身に付け、実際に戦の場面を再演しながら、古代ギリシアの歴史と文学の学習に取り組むというようなことをやっているからである。案外に「実験学校」の原形はミシガン時代のデューイの家庭にあったのかもしれない。というよりもむしろ「実験学校」はデューイ夫妻の反ピューリタニズムの育児スタイルが、彼らの子どもたちの成長とともに、家庭から学校へと拡大していったものだったのかもしれない。

1896年1月に「実験学校」が始まったとき、最初の子フレデリックは8才、二番目の子エヴリンは6才になっていた。『デューイ・スクール』の著者の一人アンナ・キャンプ・エドワーズ (Anna Camp Edwards) によれば、デューイが「実験学校」を開設した直接の動機は、一つは「自分の教育哲学をテストすること」、もう一つは「彼自身の子どもたちに成長と発達の機会を与えること」という「二重の願望」にあったという。しかも、教育哲学に関心をもつようになったのはなぜかと彼女に尋ねられて、彼は「主として子どもたちのためであった」と答えている。¹⁹⁾ 同様のことは娘のジェーンも書いている。「実験学校は、彼の子どもたちを彼自身が体験した学校時代の重荷から開放すべきものだった。」そして彼はシカゴで、自分たち夫婦と同じように、子どものために一般の学校で得られる教育とは違った種類の教育を求めている一群の親たちと出会い、彼らの物心両面にわたる協力と教育学科の賛助を得て「実験学校」の開設にふみきったというのである。²⁰⁾

デューイが「実験学校」を創設したのは自分の子どもたちのためだったと言えば、もちろん言い過ぎになる。しかし、現実に自分の子どもたちが学齢期に達し、彼らにどういう学校教育を与えることが最善かを考えたとき、いっそのこと自分の考えを実地に試すような学校を創ってみようと考え、周囲の人たちからも賛同と期待の声がある中で、学校の創設にふみきったとしても不思議ではない。しかも彼は、新設のシカゴ大学教育学科の主任という地位に着いたわけである。教育学科の整備・充実と「実験学校」の経営とを実践的な課題として、彼はいよいよ教育の理論研究に本格的に取り組むことになる。

3. 総合科学としての教育学の構想

シカゴ大学教育学科

前節で見たように、デューイはシカゴに来る前、既にミシガン時代から教育に対して強い関心をもって、新設のシカゴ大学哲学科 (Department of Philosophy) には教育学科 (Department of Pedagogy) が含まれるという条件に魅力を感じて、シカゴ大学からの招聘を受け入れた。シカゴ大学は1892年 (デューイ着任の2年前) に大学院主体の研究大学として開校したばかりで、教育学科はもとより、哲学科自体もデューイを初代の主任教授 (Head Professor) に迎えることで学科としての体制を整えるところであった。しかも、この時代のアメリカでは、教育学を師範学校ではなく大学において講ずるところは数えるほどしかなく、いわんや大学院課程において教育学を独自の学科として位置づけるところは一つもなかった。²¹⁾ だから、教育学科を主宰できるという条件を示されたとき、弱冠34才の気鋭の哲学者が全米で最初の学位授与を目的とした教育学科を自分の手で作り上げることに大いに意気込んだだろうことは当然である。

しかしながら、教育学を大学院課程の一学科に位置づけるという構想それ自体は、シカゴ大学初代学長のウィリアム・レイニー・ハーパー (William Rainey Harper) によるものであった。彼は学長に就任した当初から、新生シカゴ大学を初等から高等に至る全教育制度の頂点にたつ研究・教育機関にしようという壮大な計画をもっていた。そのために彼は、ハイスクールやアカデミーなどの中等教育機関との提携・協力関係をすすめる部局 (The Division of University Affiliations) を設置するとともに、キャンパスに各種の教育関係団体の会議や集会を多数招致した。そして、大学の各専門学科の教授スタッフにそうした会議や集会への積極的な参加を促すとともに、各専門学科でもそれぞれの分野に即した現職教員向けのセミナーや公開講座を実施することを奨励した。そうした中で、彼は大学の独立の単位としての教育学科の設置を計画し、そこで教育関係の高度な専門職の養成をめざすとともに、大学院課程の各専門学科の学生に対しても将来大学の教授職に就くための基礎教養として教育学の教育を施すことを予定したのである。²²⁾

ハーパー学長は、1892年にジュリア・バルクリー (Julia E. Bulkley) を教育学准教授 (Associate Professor of Pedagogy) に任命するとともに、²³⁾ 強力なスタッフによる教育学科の設立をめざしてチャールズ・ドゥーガーマ (Charles De Garmo) またはG.スタンレー・ホール (G. Stanley Hall) を教育学科の主任教授に獲得しようと努力した。²⁴⁾ しかしこの試みは実現せず、バルクリー女史も就任直後に3年間チューリヒ大学に教育学の研修留学に出向いていて不在だったので、教育学科はずっと発足できないままであった。ただし、デューイが着任する前年度 (1893-94年度) にルイス・セレスティン・モニン (Louis Celestine Monin) が哲学科の大学院課程で「教育史」 (History of Education) と「教育理論」 (Theory of Education) の授業をおこなっている。²⁵⁾ しかし、モニンは専任の教官スタッフではなく大学院のティーチング・フェローであった。

他方、ハーパー学長は哲学科の主任教授についても傑出した学者を獲得しようと精力的に人選を

すすめたがことごとく不首尾に終わり、哲学科の専任教官としては心理学准教授のチャールズ・ストロング (Charles A. Strong) と哲学助教授のジェームズ・タフツ (James H. Tufts) の2人しかいなかった。²⁶⁾そして、ストロングの提案によってタフツがハーパー学長にデューイを主任教授に推薦することになり、デューイに直接会ったハーパーは彼に大いに印象づけられて、この若い気鋭の哲学者を主任教授に招聘することになった。と同時に、デューイは既にミシガン時代に教育の理論研究にも着手していたので、ハーパーはこの際彼に教育学科の編成をも委ねたのであった。²⁷⁾

教育学科が正式に発足するのは1895年の秋学期 (Autumn Quarter) からである。バルクリー女史がこの年の9月に帰国し、デューイは既に前年の7月に着任してはいたが、初年度に連続3クォーターの休暇が与えられていたので、この年の1月から半年間家族とヨーロッパ旅行に出かけていた。²⁸⁾

1895-96年度の『シカゴ大学年次記録』には、教育学科は「IA. 哲学科」と「II. 政治経済学科」の間に「IB. 教育学科」として記載されている。²⁹⁾次年度 (1896-97年度) に向けての学科案内には次のように書かれている。

当学科の主目的は、教育上の諸問題を広範かつ科学的に取り扱う有能なスペシャリストを養成することである。この目的のために、開講科目は大きく3つの項目に分けられている。(1)心理学およびそれに関連する諸科目、(2)教育理論の諸科目、(3)さまざまな専門科学の教授法。ここでは第2項目の開講科目だけを掲載している。(1)と(3)の開講科目については、それぞれ該当する学科の箇所を参照すること。当学科には書籍と刊行物を十分に備えた図書室がある。博物室 (Museum) も準備中である。

教育の理論と方法を学ぶためには、その基礎として心理学の諸原理を十分に習得しておく必要がある。教育諸問題を科学的に研究するためには、あらかじめ知性の発達について現代の研究成果と方法に精通しておく必要がある。教育の究極の目的を理解するためには、倫理学によってさまざまな価値と理想を評価できるようにしておく必要がある。広い視野を獲得するためには、人間の精神史をよく知っておく必要がある。それゆえ、教育理論に関する開講科目を受講するためには、あらかじめ哲学科の3つの入門科目を受講し、そのうえで上記の諸方面の学習をすすめながら当学科の専門を深めていくようにすることが望ましい。これに加えて、さらには生物学、生理学、神経学、社会科学などの関連諸科目にも関心を向ける必要がある。

教育理論は往々にして、論理学同様、最新の科学の研究動向から疎遠なままになっている。語学や自然科学の有能な研究者や教師はそれらの科目の教授法に関してもっと積極的な貢献をすべきである。なぜなら、純粹に抽象的な教育学では、しばしば教材と方法の間の密接な関係が無視されているからである。それゆえ、他学科において、それぞれの専門科学の方法論に特に強調をおいた科目を開講するようになっている。こうした進んだ研究の最良の方法に即して授業をおこなうことに加えて、当学科では既に小学校を開講して、そこにおいて学校教育のもっと早期の段階でのよくバランスのとれたカリキュラムを作成することについて科学的に研究をすすめる機会を提供している。この学校の主な目的は正しい方法をテストし開

発することであるが、ここで言う方法とは単に教師の工夫という意味における方法ではなく、むしろ子どもの生活の必要に教材を適合させるように正しい教材選択を図るという意味での方法である。特に、教科間の相関 (correlation) の問題と、初等教育における手工 (manual training) の正しい位置づけとに留意している。また、この学校では組織的な児童研究 (child-study) もおこなっている。……

学期 (quarter) ごとに教育諸原理の実際的な応用に関する特別研究があり、自由な討論、最新の文献についてのレポート、特定の論題に即した調査報告などがおこなわれる。

また、学校現場をいろいろと見てまわり、教師や教育長の立場から理論と実践の関係を批判的に評価することも、レポートや討論による通常の授業の一部をなしている。

教育学科に付設されている小学校では、科学的な観察と調査の機会が提供される。さらに広範な観察の機会は、中等の諸学校で提供されることになろう。³⁰⁾

以上の記述から、教育学科の基本的な性格について、とりあえず次の3点を確認しておくことにしよう。

(1)教育学科は「教育上の諸問題を広範かつ科学的に取り扱う有能なスペシャリストを養成すること」を主目的にしている。

(2)教育学科のカリキュラムは、哲学科をはじめとして大学内のさまざまな学科の協力のもとに組まれているのが特徴である。学生はあらかじめ哲学科の3つの入門科目（「心理学」「倫理学」「論理学」）を受講したうえで、「心理学に関する諸科目」「教育理論に関する諸科目」「さまざまな専門科学の教授法に関する諸科目」の3分野にわたって学習を進めることになっている。これらのうち教育学科で開講されるのは「教育理論に関する諸科目」だけで、「心理学に関する諸科目」は哲学科で、「さまざまな専門科学の教授法に関する諸科目」はそれぞれ該当する学科で受講することになっている。そのほか、生物学、生理学、神経学、社会科学などの諸科目にも幅広く関心を向けるように促している。言い換えれば、教育学はさまざまな専門科学を基礎として、それらの総合のうえに成り立つと考えられている。

(3)これまでの「純粋に抽象的な教育学」に対する反省から、教育理論の実践的な研究にウエイトを置く教育学教育をめざしている。そのために、教育学科に小学校（いわゆる「実験学校」）を付設しているほか、学生たちに対して学校現場の参観や教育調査の機会を提供している。

デューイの教育学構想

デューイは、シカゴ大学が毎週金曜日に発行する『大学広報』の1896年9月18日号と9月25日号に2回にわたって「大学の学問としての教育学」という論文を発表した。³¹⁾書かれた時期は、教育学科が正式に発足して1年が経過し2年目の新学年が始まる直前であり、同時にこの年の1月に開設された「実験学校」が半年間の試行期間を経て、新学年の開始とともに再出発をする直前である。おそらくこの論文は、シカゴ大学のような大学院大学で教育学を正規の学問として位置づけること

に対する大学内外での無理解や懐疑の声に積極的に応えようとする意図から書かれたものであろう。デューイは敢然と次のように述べている。

教育学が大学の専門科目として仲間入りを果たすことに懐疑的な人々は、大学が現に有している膨大な実証的知識と、この知識をまとめあげ組織化する必要性とを見そこなっている。教育学は生半可な思弁でもなければ、思いつきや経験的な考案物を伝授することでもなくて、歴史学や社会学や経済学の領域に属する諸事実を教育という一つの領域に焦点づけ、さらにこれらの事実を生理学や衛生学や医学等から引きだされてくる諸事実と結びつけ、こうしてきわめて広範囲にわたる研究成果を実際に役立つ形で総合していくことなのである。³²⁾

ここでは、教育学は一つの総合科学として性格づけられており、だからそれは総合大学でこそ成立する学問だと主張されている。いまやシカゴ大学のような総合的な学術研究機関が成立し、自然現象について、社会の仕組みについて、人間そのものの成り立ちについて、それぞれの専門分野で組織的に研究成果が蓄積される体制ができあがった。教育学は、大学が有するこうした知的財産を最大限に活用して、これまでは抽象的な思弁か、さもなければ学校教師の実務や技巧の問題として放置されてきた教育という複雑な領域に科学のメスを入れ、教育全体を合理的に組織化していくための学問である。だが、その実現をはばんでいるのは実は当の大学人自身であるとデューイは言う。

唯一の障害は、そもそも教育というものが知的組織化になじむものなのか、本当に科学的方法の領域に属するものなのか、法則の知的適用に従うものなのかという、はっきりと言葉で表明はされなくとも何となく抱かれている懐疑論である。³³⁾

デューイにしてみれば、こうした懐疑論は「惰性化している信念」にすぎない。

この惰性化している信念がひとたび崩れ、教育が人間生活におよぼす重要性が認識される度合いに応じて、教育上のもろもろの作用を実践的に組織するための科学的な理論として、教育学を求めめる声はますます大きくなっていくだろう。……長い目で見ても、教育理論の必要性がいつまでも貧弱で不完全な形でしか理解されないままでよいなどは到底考えられない。多くの方面においてアメリカ国民が最高の教育を求めていることは、今日の最も顕著な事実である。この20年間に教育上のさまざまな関心にもとづいて費やされた莫大な経費は、歴史にその例を見ないほどである。教育上の手立てをもっと科学的に研究してこれを組織化するという課題への献身が、目の前のあれこれの直接的な教育課題への献身よりも少なくてもよいとか、これとは別のものであるなどは到底考えられない。いま必要なことは、この研究を開始して、その重要性和実用性を十分に示していくことである。³⁴⁾

デューイは、シカゴ大学を辞した3年後の1907年にも、コロンビア大学で「大学の専門科目としての教育学」という論文を発表している。³⁵⁾ ちなみに、コロンビア大学はその前年に教育学を独立の学科として開設していた。ここでも彼は、教育学を大学の専門科目とすることに反対する人々を批判している。

大学の仕事はすべて教育に関係しているにもかかわらず、教育を独立の研究対象とすることはまったくバカげたことだという主張がよくおこなわれてきた。……

教育理論の主目的は手軽で安直な教授法を、たいした学問的裏付けもなしに小売りすることだといった見方が、依然として一部の文化的保守主義者の頭の中に持続している——あたかも科学的医学は肝油その他の不快な薬を口当たりよくする方法を教えることだとも考えているかのようだ。教育学の可能性についてもっと真剣な見方をする人の多くは、それが扱う範囲の重要性に印象づけられて、それはまさに大学の学問となるのにふさわしいと考えている。他のいかなる科目もこれほどに多くの側面にわたって生活にかかわりをもつものはなく、人間の過去と現在にこれほどに刺激的な展望を与える素材をこれほどに豊かに提供するものはないと言ってもけっして過言ではない。³⁶⁾

言うまでもないことだが、教育学を大学の正規の学問に位置づけるべきだというデューイの主張は、単に教育学を他の専門学科に並ぶ独立の学科にすればそれでよしとするものではなかった。むしろ彼の主張の本旨は、それまで単なる教職志望学生向けの教科にすぎなかった教育学を大学の正規の学問にふさわしく組織することにあった。言い換えれば、それは教育学批判そのものだったと言える。

1896年の論文では教育学を“pedagogy”の用語で表していたのに、1907年の論文では教育学を“education”で表しているのも、これに関係しているかと思われる。なぜなら、“pedagogy”はもともと学校教師のための教授法(didactics)という意味が強かったのに対して、“education”で表現される教育学は教育そのものを一つの社会的な制度や機能として研究する実証科学という意味が強いからである。シカゴ大学では教育学科の名称を1901年に“Department of Pedagogy”から“Department of Education”に変更し、コロンビア大学では最初から“Department of Education”であった。シカゴ大学に続いてこの時期に同じように独立の教育学科を開設した他の諸大学でも、やはり名称は“Department of Education”を用いている。デューイの用語変更も当然こうした動向を反映したものであったろう。ともあれ、20世紀初頭にアメリカの諸大学において教職向けの教育学(pedagogy)から実証科学としての教育学(education)への流れがつけられていく中で、デューイはまさにその流れの先頭に立っていたわけで、彼の教育学論=教育学批判がそうした文脈の中で展開されていたことは確認しておいてよい。

デューイは「教育学は生半可な思弁でもなければ、思いつきや経験的な考案物を伝授することでもない」とか「教育理論の主目的は手軽で安直な教授法を、たいした学問的裏付けもなしに小売り

することだといった見方が、依然として一部の文化的保守主義者の頭の中に持続している」といった言い方で、繰り返し旧来の教育学を否定している。旧来の教育学に対する彼の批判は、要約すれば次の2点につきる。一つは、旧来の教育学は学校教師の養成・訓練という狭い課題領域に限定されてきたこと、つまりいかに授業をうまくおこなうかというメソッドの問題にとどまってきたことである。もう一つは、教育学がいまだ科学になりきっておらず、そのため世間では教育をめぐるあらゆる問題がたいした科学的根拠もなしに勝手に議論されるままになっていることである。では、彼が構想する新しい教育学とはどのようなものなのか。

教育学の内容構成

デューイの教育学構想は、直接には教育学を大学の正規の学問として確立することに主眼があったが、同時にそれは教育学を他の専門諸科学を有機的に結びあわせる総合科学として構想することでもあった。彼の構想する教育学は、教職志望者向けの単なる教職教養や教授法の体系ではなく、あらゆる教育事象を科学的に研究して、それらの合理的な組織化に貢献する理論や原理の体系である。しかも、そのような教育学は、一つの個別専門科学として成り立つものではなく、さまざまな専門科学の諸成果を教育という一つの領域に焦点づけ総合していく応用科学として成り立つものだと彼は考えていた。

デューイは「大学の学問としての教育学」(1896年9月)、「教育学科の整備・拡充案」(1897年1月)および「大学の科目としての教育学」(1907年6月)という一連の論文で、教育学を構成する各研究領域を具体的に提示している。これらを見ると、デューイが教育学という学問をさまざまな専門科学に関連づけ、そこに各分野の専門研究者を引き寄せることで、教育学を一つの総合科学として組織しようとしていたことがわかる。

デューイが考えた教育学の内容構成は、上記の三つの論文でそれぞれ多少の変化はあるが、全体としてⅠ. 教育の管理面 (administrative side) と、Ⅱ. 教育の教学面 (scholastic side) の二つの方面に分けられている。これらはそれぞれ、いわゆる「教育の外的事項」と「教育の内的事項」に相当すると見てよい。

Ⅰ. 教育の管理面はさらに、(1)教育物理・生理学 (Educational Physics and Physiology) と、(2)教育社会学 (Educational Sociology) に区分される。

これらのうち、(1)教育物理・生理学は、具体的には(i)学校建築と(ii)学校保健の研究をおこなうもので、ここでは子どもの学習活動にとって最適な物的環境を整えるという観点から、学校の建物、用地、設備、備品、美観、換気、採光、健康状態などの研究がおこなわれる。そのために、建築学、運動生理学、保健・衛生学、小児医学などの専門科学の知見が動員される。

(2)教育社会学は、教育を社会的制度の一つとして研究するもので、ここでは社会学や政治学といった社会諸科学が教育の理論研究に貢献することが期待されている。この点について、デューイは「政治学あるいはその妹である社会学は、ごく最近に至るまで、学校が家庭、教会、企業、政府な

どと同様に一つの制度であるという事実に含まれている事柄を真面目に受け取ってこなかったし、それを注意深く研究することから報酬を受け取ってこなかった」と述べている。³⁷⁾

この分野は内容的には、(i)教育制度の研究と、(ii)学校自体の組織・運営に関する研究に分けられる。そのうち、(i)は教育制度を一つの社会的、政治的の制度と見なして、そのさまざまな類型や歴史的發展、他の社会的諸制度との関連などを研究する。産業教育の問題もここに含まれる。(ii)では教育委員会の機能、教育長、指導主事、校長などの職務、教育財政と学校予算、教員養成、教育法規などが扱われる。ここでは、社会学、政治学のほか、財政学、法律学などもかかわる。

Ⅱ. 教育の教学面は、(1)教育心理学、(2)一般教育学(General Pedagogy)、(3)教育史に大きく区分される。

(1)教育心理学には、児童研究(child-study)と学習過程の心理学が含まれる。ここでは、子どもの発達段階と心理学的特性を踏まえた教材、カリキュラム、教授方法の検討がおこなわれる。

(2)一般教育学は、これまでカレッジや師範学校の教育学で最も中心的ないしは唯一の領域とされてきたものである。すなわち、教育の本質および目標に関する哲学的考察(教育哲学)と教授・訓育の方法に関する一般的理解である。デューイはこれらに加えて、教育内容の詳細な研究、とりわけ各教科の教育的価値と相互の関係の研究、および初等・中等・高等の各学校段階間の教育内容上の接続関係の研究を含めるべきだとしている。

(3)教育史には、古代・中世の教育制度史、近代公教育制度発達史などの制度面の歴史と、教育思想史の研究とが含まれる。とくに後者では哲学・倫理学思想、宗教思想との関係、各時代の一般文化や知的状況との関連が考察されなければならないとしている。

以上のほか、デューイは教育学に含まれるかどうかは別として、児童労働問題、孤児院、教護院、障害者教育、夜学校、工場学校、スポーツ・リクレーション施設等々の研究があるとしており、これらは従来まで慈善活動、刑罰学、経済学、法律学、医学などの各分野に分散して扱われてきたが、いまや「子どもの社会学」という形で体系的にまとまりをもった研究がなされる必要があると述べている。³⁸⁾

教育専門職の養成

デューイが大学における教育学研究の必要性を論じるとき、彼はなによりもそれが教育専門職の養成を目的とするものであって、学校教員の養成・訓練を目的とするものではないことをしきりに強調している。後者は従来から師範学校が担ってきた職務であり、大学はそれにとって代わるのではなく、ここに新たに大学は教育専門職の養成に取り組むべきだというのである。具体的には、カレッジの教育学の教授、師範学校の教師、教員養成所の所長、視学官、教育長などを対象に高度な専門教育をおこなうことである。³⁹⁾ これらの人々はこれまでのところ適切な準備なしに仕事に着手するか、さもなければドイツの大学に留学するしかない状態に置かれている。その結果、彼らは「不当にも偶然や気まぐれやルティーン・ワーク、あるいは科学的訓練の欠如による無益な試行錯

誤のなすがままに放置されている。」⁴⁰⁾

このように、教育学を大学の正規の学問として確立せよというデューイの主張は、一定の社会的ニーズの存在を背景にしたものであって、単に教育学の学問的な地位の向上を求めただけの主張ではなかった。つまり、背景には学校教育の普及にともなって、特に都市部ではもはや従来の慣例・慣行では処理しきれないほどに教育行政が複雑化し巨大化していたという時代状況があり、また産業技術の発展にともなって中等・高等教育では旧来の古典的な教養教育の伝統が崩れ、初等教育においてももはや初歩的な3Rsの教育だけでは間に合わなくなり、教育内容の大規模な再編と初等・中等・高等を貫く各学校階梯間の接続関係の整備といった課題が生じていたのである。そうした中で、教育界の各方面で指導的な役割を担う人々に高度な専門教育を提供する社会的な必要性も生じていたのである。

デューイは教育学科の設置と教育学を大学の正規の学問として位置づける意義について、シカゴ大学のハーパー学長に次のように進言している。

現在、合衆国においては本学〔シカゴ大学〕で開始されているものを除いて、大学で教育学の研究が体系的かつ十分バランスのとれたやり方で提供される機会は何もありません。……この仕事を最初に企画する大学は、わたしの判断では、わが国の教育界の承認と、また実にそのリーダーシップさえも確保することでしょう。ここには、アメリカの教育においていまだかつて利用されたことのない最大の機会が存在します。このことは、要請の大きさ、仕事の本質的な重要性、さらにはこの分野を最初に組織する大学が受けるであろう注目の大きさなどから判断しても言えることです。他の諸大学が本学の試みに注目しはじめていることは、コーネル大学のシャーマン学長の最近のレポートにも示されています。その中で、彼は……コーネル大学に教育学の大学院を組織することを訴えています。シカゴ大学が教育学科を設置したことに満足を示しているたくさんの手紙や文書——現代のニーズを認識している都市の教育長や師範学校の教師たちからわたしが受け取ったもの——についてここで詳細に論ずるとしたら、あなたの時間をかなり取ることになるでしょう。わたしたちの現在のこのささやかな端緒に対するこのような反響の中に、将来の可能性が予告されているのです。⁴¹⁾

実際、デューイは教育学科が開設された翌年の1896年6月に次のように報告している。

教育学科の主たる目的は教員の養成ではない。むしろそれは、既にかかなりの経験をもち、いまや彼らが従事している仕事の合理的諸原理や最新の教育動向についてより徹底的に知ろうと望んでいる教師たちを受け入れている。したがって、以前に指導主事や師範学校の教師であった人たちが教育学科の大学院生の大きな部分をなしている。⁴²⁾

デューイは、大学による教育専門職養成と師範学校の教員養成との間には、人材供給という点で

分業が成り立つと考えていた。しかし、彼の本来のねらいはただ単に高度な専門性をもった人材の育成という点だけにあったわけではない。もちろん直接にはそうした役割を果たしつつも、実はそのことを通して大学そのものを公教育制度全般を統括する中心機関に位置づけようとするのが彼の本来のねらいであった。つまり、大学は自由な真理探究をおこなう研究機関であり、そこに教育学科を設立して、公教育にかかわるありとあらゆる問題について科学的な研究・調査をおこない、科学の明証性に基づいて公教育制度全般を組織し指導していく、シンクタンクのような役割を大学は果たすべきだというのである。実際、彼は次のように述べている。

わが国の教育制度が専門家筋 (expert sources) からのある種の方向づけと組織化をいま必要としていることは明らかである。政府がこの必要に応えないのであれば、民間でそれに取り組む必要性はそれだけ大きいものとなる。それは、官僚統制の権威はもたなくとも、科学の権威をもたなければならない。極端な分権化に向かう無秩序が際限もなく続くべきではないとすれば、大学こそが教育を組織する自然な中心となるべきである。大学は、現在のきわめて多様な実践の中から最良のものを収集し集約し、それを科学的に吟味して、具体的に利用できる形に仕上げ、政府の強制というお墨付きではなく、科学的証明というお墨付きによってそれを公教育制度の中に流布させていくのである。必要なことは、わが国の教育制度のさまざまな部分が互いに協調し、民間の自由で活発な相互作用に基づいて組織化されることである。ドイツやフランスの中央教育省がそれぞれの国情のもとで成し遂げていることを、われわれはこうした民間による組織化によって成し遂げるのでなければならない。⁴³⁾

この文章から、教育専門職養成に込めたデューイのねらいがはっきりと読み取れるだろう。彼は、一方で公教育制度の中央集権的な官僚統制を忌避し、他方で「極端な分権化」による「無秩序」をも避けるため、いわば第三の道として「科学の権威」に基づいたエキスパートによる指導と組織化を提唱している。そして、中央教育省がなく教育の地方分権の伝統が根強いアメリカでは、大学が教育を科学的な研究の対象とし何らかの権威ある発言をするようにしていかなければ、教育問題はいつまでたっても喧騒と場当たりのなやり方と地域ボス政治家の打算によって解決が図られるほかないと警告している。⁴⁴⁾

ここには科学に対する素朴な信頼、というよりも「科学の権威」に対する楽観的な見通しがある。彼は、科学の明証性こそが合理的な問題解決と人々の合意形成を可能にしていると見ている。しかし、やがて登場する教育行政の科学的管理の体制は彼にはまだ見えていない。あるいは、教育測定運動が行動科学の名のもとに教育そのものを人間馴致のテクニックの体系に変えてしまうことを彼はまだ予想できていない。彼はただ、自由な真理探究の場である大学が、教育についても「新しい真理の発見と検証」に従事し、そこでの研究成果を社会に還元し、教育の改善に貢献することは、公教育制度の頂点に位置する大学として当然の責務ではないか考えているにすぎない。そして、大学で養成される教育専門職者を通じて科学の福音が教育現場にもたらされ、さまざまな教員集団、教育

研究団体が大学を一つのセンターとして「知のネットワーク」を構成し、そこに真理探究の共同体が組織されるならば、大学は公教育全体をボランティアな形で統括する「自然な中心」となることができるだろうと考えていたのである。

実験科学としての教育学

以上のように見てくると、デューイの教育学構想は新生シカゴ大学の理念に密接に関係していることがわかる。この大学は、古典的教養中心の旧来のカレッジの伝統をまったくもたず、最初から大学院中心の研究大学として発足したのであった。そこでは既成の学問的知識を万遍なく教授することよりも、それぞれの専門分野で最先端のオリジナルな研究がおこなわれることを優先していた。したがって、デューイが「大学の学問としての教育学」を論じたときも、彼はもっぱら教育についての理論的・科学的研究の必要性を論じたのであって、単に教育学の必要性を一般的に論じたのではない。

彼が大学の教育学科は教員養成を目的とするものではないとしたことも当然であった。なぜなら、大学の教育学科は初学者を対象に初歩的な教育理論を教授したり、教授法の基本について実践的な訓練を施すことを目的にしているのではないからである。それは、既にカレッジや師範学校を卒業して一定の学識を有している者、あるいは教育現場の実情にある程度精通している者を対象に、既存の教育理論や実践を批判的に吟味し、彼らが「教育学上の発見や実験」というオリジナルな研究活動に従事することを目的にしているのである。⁴⁵⁾

要するに、理論の教授よりも理論の生産に重点を置くこと、それが大学の学問としての教育学の使命なのであった。それゆえデューイは「もし教育科学というものがあるとすれば、それは実験科学 (experimental science) であって、純粋な演繹科学ではない」と述べている。⁴⁶⁾そこには、従来の教育学がもっぱら思弁的な理論を講義により書物によって教えていることへの批判がある。と同時にそこには、シカゴ大学の理念に象徴される新しい学問研究の方法に対する彼の全面的な支持がある。

いまや大学のあらゆる学問は研究 (research) という側面、調査 (investigation) という側面をもち、これまでの研究蓄積に新たな研究成果を付け加えていくという側面をもっている。大学の機能は、過去の理論や実践の成果を収集し体系化し保存することだけでは尽くされないのである。そこにはこれまでの研究成果を現実の要請に照らして吟味するという責任があるのであり、新しい事実、新しい原理の発見に積極的に貢献するという義務が課せられているのである。大学の仕事の中心はますます実験室に、セミナーの研究施設に移ってきている。⁴⁷⁾

デューイが教育学は「実験科学」だと言うときの「実験」という言葉をあまり狭い意味に解しないほうがよい。ここで言われている「実験」とは、理論を実践に適用し、その理論が実践を導く指

針としてどれだけ有効性をもちうるかを確かめるといった比較的広い意味で言われている。だから、それは教育学を、教育上の具体的な手立ての改善に役立つ実践的な科学として打ち立てるということを意味している。

教育学の実験室としての学校

以上のように、デューイが構想する教育学は、初学者に初歩的な教育理論を教授することを目的とするものではなく、従来の教育理論が実践を導く理論として実際にどれだけ有効性をもちうるかを批判的に吟味し、新たな研究成果を付け加えていくこと、つまり新しい事実、新しい原理の発見というオリジナルな研究に従事することに中心を置くものである。それは、教員養成の実際的な必要に応じる教科 (subject) ではなく、教育についての理論研究をおこなう学問 (discipline) である。しかもその理論研究は、理論の有効性を実践を通して確かめるという意味で「実験科学」のそれである。

ここから、大学の教育学科にも実験室 (laboratory) が必要であり、教育学の実験室は学校そのものでなければならないという主張が出てくる。実際、デューイはシカゴ大学教育学科が開設された3か月後の1896年1月に「大学附属小学校」(University Elementary School) という名称で教育学科に小学校を開設した。後に「実験学校」(Laboratory School) と呼ばれるこの学校の基本的な性格は、実はこの学校が、教育についての理論研究を推進する大学の教育学科の附属研究施設であるということに密接に関係していた。

まず第1に、この学校は師範学校の附属小学校とはまったく性格が異なる。このことをデューイはしきりに強調している。すなわち、師範学校の附属小学校は教員養成を目的とした「実習校」(practice school) であり、ここでは既に確立されている方針に基づいて実際の授業活動の実地訓練がおこなわれる。これに対して、大学の「実験学校」は教育の理論研究を目的に、さまざまな理論や概念の有効性を吟味し立証するために授業活動が展開される。したがって「実験学校」ではいっさいの伝統や既成の観念から自由な立場で、一般の学校ではとうていおこなうことができないような大胆な仮説に基づいた教育実験がおこなわれる。つまり、教育理論の開発と検証のための「実験室」だということである。

第2に、大学の「実験学校」は、ある特定の思想や学説に基づく教育実践を実地にデモンストレーションしてみせるモデル・スクールとも異なる。なぜなら大学の「実験学校」はその精神においては、教育の一般原則の発見とそれに基づいた教育理論の構築を目的にしているのだからである。ある特定の思想や学説に基づいた教育実践の普及と発展を目的にしているわけではないからである。その点では、シカゴ大学の「実験学校」を「デューイ・スクール」と呼ぶのは誤解を招く。

第3に、「実験学校」は現にそこに入学してくる子どもにどのような種類の教育を与えるかということよりも、むしろ科学的な教育理論の構築ということに力点が置かれている。それは、よく言われるような「子ども中心の学校」であるどころか、むしろ「研究中心の学校」とさえ言える性格

をもっている。実際デューイは、大学の研究施設として付設される学校は「個々の生徒に関係するよりも、むしろ吟味され立証される諸原理に関係する」と言っている。⁴⁸⁾ 同様のことを次のようにも述べている。

大学の見地から見て、附属小学校の最も重要な役割は、科学的なそれ——すなわち教育理論の進歩に対する貢献である。ただ単に一定数の子どもたちを教育するために大学に小学校を設けるというのでは、中等教育を終了した者のみを受け入れるという大学の伝統から逸脱することになり、大学としては納得しがたいことになろう。ただ科学的な目的のみが、すなわち他の諸科学の実験室に匹敵する実験室をもつことになるのだということのみが、大学に小学校を設けることの理由となるのである。⁴⁹⁾

第4に、教育理論への貢献という点に関して「実験学校」は、教科課程 (course of study) の開発に特別な課題をもっている。なぜなら、教科課程の開発こそは教育実践上の最も切実な研究課題だからである。

一般に、シカゴ大学実験学校と言えば自由放任の児童中心主義の学校と考えられ、そこでは子どもたちが思い思いに工作や遊戯にうち興じ、それがそのまま学習だとされていたかのように誤解されている。しかし、実態はそれとはまったく異なっており、そこでは子どもたちに何をどこまで学習させるかという明確な学習目標の設定があり、それに即した教材・教具の綿密な開発と、さらには各教科にわたる系統的な教科課程の編成がおこなわれていた。そのために「実験学校」では、子どもの精神発達についての最新の心理学の研究成果が実践を通して検討されるとともに、子どもの精神発達の過程に即した系統的な教科課程の編成が実験的に取り組まれたのである。

デューイは「実験学校は応用心理学の実験室だ」と述べている。その意味するところは、この学校は「精神が子どもの中でどのように発現し発達するのかを研究する場所」だということである。つまり、精神の発生論的な研究をおこなう実験室だということである。しかも、精神は真空の中でひとりでの発現し発達するわけではないから、当然その研究は「正常な発達の諸条件を最もよく充足し促進するような素材および働きかけ」の研究となる。つまり、教育の内容と方法の研究となる。⁵⁰⁾

……この学校の任務は、現代心理学が解明した精神の活動と成長過程の諸原理に照らして子どもの教育を考察することである。……

その実際的な方面においては、この実験室が取り組む問題は、子どもの能力と経験の自然な成長過程に調和する教科課程 (a course of study) を構築するという形をとる。すなわち、特定の成長段階に見られる主要な要求や諸力に最も的確に応答する学習内容を選択し編成すること、そして選択された教材が子どもの成長過程の中にいきいきと入り込むことができるように教材を提示する方法を構築することである。⁵¹⁾

そして、シカゴ大学の『年次記録』の中の教育学科に関する説明の中で、附属小学校の目的は次のように記載されている。

当学科では既に小学校を開設して、そこにおいて学校教育のもっと早期の段階でのよくバランスのとれたカリキュラムを作成することについて科学的に研究をすすめる機会を提供している。この学校の主な目的は正しい方法 (method) をテストし開発することであるが、ここで言う方法とは単に教師の教え方という意味における方法ではなく、むしろ子どもの生活の必要に教材を適合させるように正しい教材選択を図るという意味での方法である。特に、教科間の相関 (correlation) の問題と、初等教育における手工 (manual training) の正しい位置づけとに留意している。また、この学校では組織的な児童研究 (child-study) もおこなっている。⁵²⁾

以上のように「実験学校」は、子どもの学習活動を実際の教室場面の中で組織し、それを生きた標本にしなが、教科課程の編成原理と教授方法の原則を発見し検証する実験室であって、単に一連の新奇な実践をあれこれ実際に試してみるという意味での実験学校ではなかったのである。

註

- 1) デューイが設立したいわゆる「実験学校」の正式名称は“The University Elementary School”であった。通常「大学附属小学校」と訳されている。ただし、デューイが学校開設前の1895年に書いた「大学附属小学校組織計画」という文書のタイトルでは“The University Primary School”という表現が用いられている。また、学校開設直後の1896年春に彼が書いたある文書のタイトルは“The Need for a Laboratory School”となっている。さらに、シカゴ大学が発行する『大学広報』(University Record)の同年11月6日号に掲載されたこの学校についての彼の報告文書のタイトルは“The University School”になっている。“The University Elementary School”の表現がはじめて登場するのは『大学広報』の1897年5月21日号にデューイがこの学校について書いた報告文書のタイトルとしてで、それ以後この学校に関する『大学広報』の記事や報告文書のタイトルはすべて“The University Elementary School”になっている。したがって“The University Elementary School”という呼称は、学校開設後1年が経過した1897年からだったことになる。それまではデューイ自身いくつか呼称を変えていた。(なお、巷ではこの学校のことを“The Model School”とか“The Experimental School”とか“The Dewey's School”とかと呼んでいた。)ところが、1901年になってフランシス・パーカー (Francis Wayland Parker) のシカゴ教員養成学院 (The Chicago Institute) がシカゴ大学に教育学部 (The School of Education) として編入されることになり、その附属小学校が“The University Elementary School”の名称を用いたので、デューイの学校の方はやむなく“The University Laboratory School”の名称を用いた。しかし、翌年には両校は一つに統合され、結局“The University Elementary School”の呼称が使われることになった。
- 2) John Dewey, *Plan of Organization of the University Primary School*, in *Early Works of John Dewey*, vol. 5, pp.223-243.
- 3) John Dewey, “My Pedagogic Creed,” in *Early Works* 5, pp.84-95.
- 4) Dewey to Harper, February 15, 1894. George Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey* (Carbondale, Illinois: Southern Illinois University Press, 1973), p.74, より引用。
- 5) Jane M. Dewey, “Biography of John Dewey,” in Paul Arthur Schilp ed., *The Philosophy of John Dewey* (New York: Tudor Publishing Company, 1939), p.27.

- 6) Ibid., p. 27.
- 7) George H. Mead, "The Philosophies of Royce, James, and Dewey in Their American Setting," *International Journal of Ethics*, vol.40, January 1930, pp.227-228.
- 8) John Dewey, *Democracy and Education* (1916), *Middle Works* 9, pp. 338-339. デューイ『民主主義と教育』(下), 岩波文庫, 1975年, 200-203頁.
- 9) J. M. Dewey, op. cit., p.27.
- 10) Ibid, p.27.
- 11) Ibid, p.27.
- 12) John Dewey, "The Psychology of Infant Language," *The Psychological Review*, vol. 1, January 1894, pp.63-66, in *Early Works of John Dewey*, vol. 4 (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1971), pp. 66-69. なお, この論文が自分の三人の子どもの観察に基づいたものであることは, デューイ自身が晩年にサヴィッジに手紙で証言している。Dewey to Savage, May 30, 1949, in Willinda Savage, "The Evolution of John Dewey's Philosophy of Experimentalism as Developed at the University of Michigan," Unpublished Ed. D. Dissertation, The University of Michigan, 1950, p.18.
- 13) Savage, op. cit., p.275.
- 14) Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey*, p.66, 参照。
- 15) Savage, op. cit., p.274. なお, このエピソードにはマックス・イーストマンによる別のバージョンもある。「アンナーバーの家では, デューイの書齋はバスルームの真下にあった。ある日彼が書齋で新しい数学理論に没頭していると, 突然背中に水が流れ落ちるのを感じた。椅子から飛びあがって二階にかけのぼってみると, バスタブは船隊でうめられ, 水があふれていた。そして, 幼いフレッドが両手で船隊を打ち沈めることに夢中になっていた。ドアを開けると, その子は振り向きざまにきっぱりとこう言った。『いいから, ジョン, モップをもってきて。』」Max Eastman, "John Dewey," *The Atlantic Monthly*, vol., p.676-677. これはやや誇張された話のように思われるが, デューイだったらさもありなんといい話として伝わったのだろう。
- 16) Savage, op. cit., pp.274-275.
- 17) Ibid., pp.275-276.
- 18) Ibid., p.276.
- 19) Katherine Camp Mayhew & Anna Camp Edwards, *The Dewey School: The Laboratory School of the University of Chicago, 1896-1903* (New York: Appleton Century Company, 1936), p.446.
- 20) J. M. Dewey, "Biography of John Dewey," pp.27-28. なお, メイヒュー=エドワーズは, 「教育の諸原理を実践においてテストする学校」というアイデアは「関心を同じくするグループや友人たちが, この種の学校教育を自分たち自身の子どもに経験させたいという願望から生じた」と述べている。そして, デューイが『大学附属小学校組織案』という私家版のパンフレットの中で定式化した一連の教育原則は, このグループの中で議論されてきた諸観念だったと述べている。Mayhew & Edwards, *The Dewey School*, p. 5.
- 21) デューイは, 1896年にシカゴ大学のハーバー学長に宛てた私的な文章で, 次のように述べている。「現在, 合衆国においては本学 [シカゴ大学] で開始されているものを除いて, 大学で教育学の研究が体系的かつバランスのとれたやり方で提供されているところはどこにもありません。……この仕事を最初に企画する大学は, わたしの判断では, わが国の教育界の承認と, また実に教育界のリーダーシップさえも確保することでしょう。」John Dewey, "The Need for a Laboratory School," *Early Works* 5, p. 433
- 22) Robert L. McCaul, "Dewey's Chicago," *The School Review*, Summer 1959, pp.261-266, 参照。ハーバー学長は, 若い講師や大学院生が教育学を学ぶ意義を次のように述べている。「どこかの高等教育機関で教授職に就く準備をしている講師や大学院生は, 教育学科の開講科目の受講を考えるべきである。天性の才能から教育者に向いている人もいるけれど, そういう人でも教育学と教育方法の歴史を深く学ぶことは有益であろう。他方, 熱心な努力によってはじめて教師として成功するようになる人もいる。こうした人々にとってはそのような教育学の知識はぜひとも必要である。」"The Sixteenth Quarterly Statement of the President of the University, October 1, 1896," *University Record*, The University

- of Chicago, vol. 1, no. 28, October 9, 1896, p.384.
- 23) McCaul, op. cit., p.258.
 - 24) Ibid., p.266.
 - 25) Ibid., p.258.
 - 26) Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey*, p.77.
 - 27) McCaul, op. cit., pp. 259, 260.
 - 28) Dykhuizen, op. cit., p.79.
 - 29) *The Annual Resister 1895-96, The University of Chicago* (Chicago: The University of Chicago Press, 1896), pp.52-54.
 - 30) *Ibid.*, pp.52-53.
 - 31) John Dewey, "Pedagogy as a University Discipline," *University Record*, The University of Chicago, vol. 1, no.25 (September 18, 1896), pp.353-355, and vol. 1, no.26 (September 25, 1896), pp. 361-363. この論文は, *Early Works*, vol. 5. pp. 281-289, に収録されている。なお、この論文の邦訳が 大浦猛編, 遠藤明彦・佐藤三郎訳『デューイ・実験学校の理論』明治図書, 1977年, 127-137頁にある。
 - 32) Dewey, "Pedagogy as a University Discipline," *Early Works* 5, p.286. (邦訳, 133頁)
 - 33) *Ibid.*, p. 289. (邦訳, 136頁)
 - 34) *Ibid.*, p. 289. (邦訳, 136-137頁)
 - 35) John Dewey, "Education as a University Study," *Columbia University Quarterly*, vol. 9, July 1907, pp.284-290. この論文は, *Middle Works of John Dewey*, vol. 4 (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1977), pp. 158-164, に収録されている。
 - 36) Dewey, "Education as a University Study," *Middle Works* 4, pp.158-159.
 - 37) *Ibid.*, p.159.
 - 38) *Ibid.*, p.160.
 - 39) Dewey, "Pedagogy as a University Discipline," *Early Works* 5, p.281. (邦訳, 128頁) また, John Dewey, "The Need for a Laboratory School," *Early Works* 5, p.433. これはシカゴ大学のハーバース長に私的に書いたもので, おそらく1896年の春に書かれた。
 - 40) Dewey, "The Need for a Laboratory School," p.433.
 - 41) *Ibid.*, pp.433-434
 - 42) Dewey, "A Pedagogical Experiment," *Early Works* 5, p.244
 - 43) Dewey, "Pedagogy as a University Discipline," *Early Works* 5, pp.282-283. (邦訳, 129頁)
 - 44) Dewey, "Education as a University Study," *Middle Works* 4, p.159. See also, pp.163-164.
 - 45) Dewey, "Pedagogy as a University Discipline," *Early Works* 5, pp.281-282. (邦訳, 128頁) なお, デューイが教育学科開設の翌年に書いたある論文では「以前指導主事や師範学校の教師であった人たちが教育学科の大学院生のかかなりの部分を構成している」と述べている。Dewey, "A Pedagogical Experiment," *Kindergarten Magazine*, vol. 8, June 1896, in *Early Works* 5, p.244. また, 1899-1900年度に大学院のデューイのクラスに登録した学生の多くは, シカゴ市の教員だったと指摘されている。Rosemary V. Donatelli, "The Contributions of Ella Elagg Young To the Educational Enterprise," Unpublished Ph. D. dissertation, The University of Chicago, 1971, p. 140.
 - 46) Dewey, "Pedagogy as a University Discipline," p.288. (邦訳, 135頁)
 - 47) *Ibid.*, p.288. (邦訳, 135頁)
 - 48) *Ibid.*, p.288. (邦訳, 136頁)
 - 49) John Dewey, *The School and Society*, 2nd ed. (1915), *Middle Works* 1, p. 67. (宮原誠一訳『学校と社会』岩波文庫, 1957年, pp.97-98.)
 - 50) *Ibid.*, p.67. (邦訳, 98頁)
 - 51) *Ibid.*, pp.67-68. (邦訳, 98-99頁)
 - 52) *Annual Resister 1895-96, The University of Chicago*, p.52.